

春の到来

Spring has come



堀内健司*

連休のこの時期に、山間部を野鳥の囀りを聞きながら歩き、良い出会いがあれば、姿を写真に収める（できれば「花と野鳥」になれば嬉しい）というのが楽しみの一つである。冬鳥たちはシベリア方面などの北の繁殖地に渡ってしまったが、入れ替わるように、東南アジアなどで冬を過ごした夏鳥たちが繁殖のために日本に飛来する。毎年心待ちしているのが、瑠璃色の額や背中、紺色の目先から前頸、真っ白な腹部のオオルリ（オス）が木の上で朗らかに囀る雄姿との遭遇である。全長約16cm、体重約30gもない体で、数千kmも気象条件や地理、地形などを利用して長旅をしてくる。その囀る姿は雄姿というのに相応しい。

20年以上前から同じ地区でオオルリ等の高原の鳥たちを連休中などで見ているが、年々夏鳥を見れる時期が早くなってきていると感じる。探鳥地に比較的近い諏訪地方気象台の過去30年の年平均気温の経年変化を調べてみると、年毎の変動はあるものの右肩上がりの傾向であり、30年間に年平均気温が約0.4℃上がっている。30年以上も前、私が新入社員だったときの入社（4月入社）後の初仕事で、皇居周辺におけるサクラの花見の場所取りであった。平成最後の東京のソメイヨシノの満開日は3月27日となったことを考えると、約十日程度の差異がある。東京管区気象台のここ数十年の年平均気温変化を調べてみても平均的には右肩上がりの上昇傾向である。このような気温などの気候変化が、植物や身近な鳥類の生態へも何らかの影響をもたらしているであろう。

ドイツの研究者が、植物発育の特徴的な状況（開花、落葉など）を過去100年以上前から観測している多くのデータを基に分析した結果、生物季節観測的な冬の日数が近年短くなっており、春の到来が早くなっていると報告した記事を最近目にした。ドイツ国内の植生に基づくものであるが、日本も同じような現象となっているのかもしれない。

鳥たちは風を読み、風を利用して生きているが、同じように自然を利用しながら私たちがエネルギーを得ている技術の一つが風力発電である。春が近づき冬鳥が帰り、夏鳥が到来する時期に移り変わると、南からの爽やかな風が増えてくる。この時期、その心地よい風のなかで、風車周辺に咲く花々を手前や背景に入れたり、雪解けの山などを背景にしてナセルの向きやブレードの位置などに配慮しながら写真を撮ると、自然の風を利用している風車がより美しく見える（個人的な見解。私の現状では、なかなかこのような良い出会いは少ない）。

被写体となる風車は、できれば国内メーカーであると良いと思っているが、平成最後の年の初めに悲しいニュースが入ってきた。国内の大型風力発電機の主力供給元であるH社が今後製造から撤退するとのことである。数年前に国内大型風力発電機製造業の先駆者M社が国内製造から撤退したのに続く事態となった。H社では、ダウンウィンドロータを採用するという日本に多い山岳や丘陵地における設置に有利な風車を製造しており、日本独自の技術を持つ風車である。結果的に、日本では適切に国内市場が成長せず、大型風車製造業の衰退となってしまったようである。世界の風力発電市場は2018年に約51GWの新設があり、累計約591GWと拡大し、世界の電源設備容量全体の約1割に近づく勢いである。この世界市場の拡大や変化等に対し、風車メーカーの再編等の動きが顕著となり、その一つとして現れた事象と思われる。

風車だけではないかもしれないが、「日本のものづくり」はどうなるのであろうか。平成から令和へと新しい時代になったが、「花と野鳥」と同じように「花と国産風車」の姿をいつまでも見られるようにと願いながら、今年も凶鑑を片手に山野を歩いているところである。

* (株) JIST